

What's Love Got to Do with It? What's Love Got to Do with It? 公民権運動の記憶とブラック・パワー Memories of the Civil Rights Movement and Black Power

藤永康政
FUJINAGA Yasumasa

はじめに

1970年4月、学生非暴力調整委員会（Student Nonviolent Coordinating Committee, SNCC）の元議長ストークリー・カーマイケルは、かつてのマーティン・ルーサー・キングの側近であり歴史家のヴィンセント・ハーディングが所長を務める黒人世界研究所（Institute of the Black World）のシンポジウムに招かれ、このように語った。

数週間前、この国に帰国してすぐ、わたしはマーティン・ルーサー・キング博士に関する記録映画を観たのですが、強く驚愕せざるを得ませんでした。ミシシッピのブラック・パワー行進がまったく取り上げられていなかったのです。誰がこの映画を製作したのか、确实なところはわかりませんが、こう言わなくてはいけないでしょう。歴史の力にいちやもんつけるんじゃない。彼らにも言いたいことはあるでしょうが、事実はこうなのです。ミシシッピのブラック・パワー行進は、この国に住む黒人たちの生活の重要なファクターとなっている。この事実を閉却するのは、歴史の力に手出ししようとしているに等しい。歴史の力に手出しするならば、その力そのものによって滅ぼされることになる。これが事実なのだ。本来そうではなかったものにキング博士を描こうとすることを、許すことはできない。

キング博士はわれわれに多くのことを教えてくれました。彼が教示したことを理解し、それを受け容れなくてはなりません。彼が伝えたのは対決の方法なのです。マルコムXでもなければ、ブラック・パンサー党でもなく、キング博士がそれを

教えてくれたのです。そう、キング博士が。彼の戦術は非暴力でしたが、教えてくれたのは対決する方法なのであり、それを身でもって示してくれたのです¹。

このように、カーマイケルは、彼自身がブラック・パワーをアメリカ黒人の運動のスローガンとして提唱した瞬間——1966年6月のジェイムズ・メレディス狙撃に抗議するミシシッピでの行進——が忘却されようとしていることにはっきりとした異議を申し立てていた。ここに現れている語気の激しさは、しかし、彼が冷静さを失っていたことを意味しない。その実、ほかの公民権指導層がブラック・パワーに傾倒する者たちを包括的に否定するようになって、キングは、その生涯を通じて、若き黒人ラディカルズには是々非々の態度で臨み、彼ら彼女らにとっての貴重な理解者であり続けた²。有名なドキュメンタリー『勝利を見すえて』(*Eyes on the Prize*)をみればたちどころにわかるように、ミシシッピの行進の最中、SNCC活動家たちとキングとは、文字通り腕を組み合せて、白人至上主義者の妨害や野次のなか、ミシシッピの灼熱のハイウェイを行進している。キング暗殺後わずか2年、カーマイケルのこの発言は、公民権運動の対決主義的な性格が忘却され始め、今日われわれが〈キング牧師生誕記念日〉などで目にする偶像化がすでに始まっていたことを示している。

本稿は、キングの非暴力的運動とブラック・パンサー党の急進的運動を再検討することを通じ、この忘却された公民権／ブラック・パワー運動の像を少しばかり解像度を上げて見つめていく。この二つを検討対象とするのは、両者がそれぞれ、〈非暴力・人種間融和・愛〉と〈暴力・分離主義・憎悪〉という、「公民権運動」という名前のもとで一般に想起される、二つの象徴的両極に位置しているからである。そして、次のような互いに関連する二つの問いを発してみたい。〈非暴力・人種間融和・愛〉を説いた公民権運動は、公民権法と投票権法を勝ち取り、所期の目的を達成し勝利した。はたしてそうであろうか。〈暴力・分離主義・憎悪〉を説いたブラック・パワー運動は、アメリカ社会の分裂を招来することで黒人の運動を袋小路に追い込み、ひいては運動の大義を貶めた。はたしてそうであろうか。「長い公民権運動論」が同様の問題を提起してもはや久しいのだが、本稿は、上に述べた問題意識

のもと、改めてこの主題に取り組んでみたい。

本稿の前半では、キングが公民権指導層の一角に加わった運動、モンタゴメリー・バス・ボイコット運動にフォーカスしていく。キングが運動の現場で実践した非暴力は、今日想起されるイメージと同一のものであろうか。本稿後半はこの問いを引き受けながら、ブラック・パンサー党（Black Panther Party）の活動に焦点を移す。黒のレザージャケットにショットガンを携行したパンサー党員のイメージは、その運動方針の変化にも関わらず今日も一般に広く流布しており、60年代後半の都市危機と人種対立の象徴にもなっている。では、そのイメージは史実に根拠をもっているのだろうか。

ここまでいくぶん反語のような問いが続いてきた。そこで、行論を明確にするため、ここで本稿の中心となる議論を予め示しておこう。公民権運動は非暴力の運動ではなく、暴力に彩られた運動である、これをいったん認めたら、われわれの公民権運動／ブラック・パワー運動史理解は変わらざるを得ない、ではそこからどのような像が生まれてくるのであろうか。本稿のねらいは、この新たな問いかけが生まれる空間を開きつつ、ひいてはこの問いへのひとつの答えを提示しようとするところにある。

〈公民権運動＝善〉対〈ブラック・パワー運動＝悪〉、この二項対立を脱構築しなければならぬ、この「長い公民権運動論」の要請は、実際のところ、語るに易く、きわめて行に難い。ブラック・パワー運動について筆者はこれまで幾度も論じる機会があったが、彼ら彼女らの行動やヴィジョンの積極面を述べようとすればするほど、それが1960年代後半のラディカリズムに関してのある種のアポロジーに陥ってしまっているという感覚を覚えざるを得なかった。ブラック・パワー運動のみを取り出して、そこに積極面をみることだけでは、この要請を達成することはできず、むしろ問題は、公民権運動の前半期を殊更非暴力的に記憶する言説にあるのではなかろうか。小論はこのような直観から発している。

これを述べたところでこの小論を現在進行中の公民権運動／ブラック・パワー運動史研究の文脈に置くために、先行する研究の大きな論点を簡単に紹介しておこう。このフィールドの代表的研究者のひとりであるペニール・ジョセフは、ブラック・パワー運動が公民権運動の理想を台無しにし、ホワ

イト・バックラッシュを招いたという解釈に異議を唱え、これが先行する公民権運動の未決の課題を引き受けつつ発展したものであるとする議論を提示し、「長い公民権運動論」にならって「長いブラック・パワー運動」という時代把握の枠組みを提示している³。しかしながら、公民権運動の時期をブラウン判決で始めキング暗殺とニクソン当選で終える見解に異議を唱え、この運動の軌跡を正確に理解するにはより長い時間枠でみるべきであるとする主張は、そのまま「長い公民権運動論」をなぞるものにはかならず、彼の提言は、これまでの公民権運動史研究の認識の枠組みを大きく変化させるものではない。それは、忌憚なく言って、単なる言葉の遊びに過ぎない⁴。そもそも「長い公民権運動論」にしても、明確な時代区分なく前後にただ時間枠を延ばし、そこに多様な運動を押し込むことは、結局のところすべてに吸い付く「永遠の生命をもつ吸血鬼」のような運動を生み出すに等しく、歴史学議論として無効であるとして、すでにチャ＝ジュアとラングらによって鋭く批判されているところでもある⁵。ならば、今後の研究が引き受けなくてはならない課題のひとつは、数々のブラック・パワー運動に関する実証的研究がその肯定的再評価を行い、公民権運動の継続性を指摘しているにも関わらず、なぜブラック・パワー運動は依然として否定的に回顧されることが多いのかを解明することにある。小論のいまひとつのねらいはまさにこの点にある。

非暴力としての公民権運動再考

通俗的な公民権運動史の理解のなかで、1955年12月1日のローザ・パークス逮捕を直接的契機とし、1年以上にわたるボイコットを経て市バスにおける人種隔離撤廃を勝ち取ったモントゴメリー・バス・ボイコット運動が占める位置はきわめて大きい。何はともあれ、アメリカ黒人の運動は、このボイコット運動を通じて、マーティン・ルーサー・キングという稀代の「指導者」を得た。さらにまた研究者のあいだでも、大衆運動の局面を切り拓くことで法廷闘争中心の公民権運動を質的に変化させたとする理解は、一定のコンセンサスに達していると言ってもいいであろう。近年では、シオハリスや

マクガイヤらの研究を筆頭に、1930年代に遡るパークスのラディカルな運動家としての側面に焦点があたるなど、バス・ボイコット運動の表向きの指導層を担った男性牧師たちだけでなく、運動の口火を切り、その主体となった女性たちにますます多くの関心が集まる傾向にある⁶。このような「脱キング牧師中心的」な研究が解明し強調しているのが、グラスルーツの運動の軌跡とその強靱さなのだが、この章で改めて問いたいのは、むしろキング、そして彼が体現する非暴力である。というのも、カーマイケルが語るキングが伝えた「対決の方法」とは何なのかを明らかにするためには、キングが象徴する「非暴力」にまず迫る必要があるからだ。

モントゴメリーの運動における非暴力、この問題はすでに数多くの論者によって何度も語られてきたものである⁷。しかし、小論の焦点は、先行の研究とは異なりキング個人の成長やボイコット運動の具体的プロセスにあるのではなく、むしろ非暴力としての運動の解釈にある——ボイコット運動が達成したとするバス座席の人種隔離撤廃は果たして「非暴力の勝利」なのだろうか、これを検討することが小論にとっての中心的課題である。

当初、ボイコットを主導したモントゴメリー改善協会（Montgomery Improvement Association, MIA）は、黒人が後列から、白人が前列から着席し、人種隔離それ自体を問題としないという改善策、いわば「分離すれども平等」の範囲内で事態の改善を要求した。つまり、MIAにとって、人種統合は目的ですらなかったのである。ところが、このような穏健な要求に対しても、MIAの予測に反して市側は頑なな態度をとり、ボイコット開始約1週間後に交渉は早くも物別れに終わっていた⁸。

一方、この間にMIAは、自家用車を活用し通勤の便宜を図るカー・プールなどを整備するなど、ボイコット長期化に備えた動きを着実に進めていた。このような手法は、モントゴメリーでの運動に先立つルイジアナ州バトン・ルージュでの同種の運動から直接示唆を得たものであり、公民権運動史研究者の多くは、ここにブラック・コミュニティ間のネットワークの存在と、それを機敏に活用するリーダーシップの狡智をみている。しかし、モントゴメリーでの事態の推移は、市当局が妥協的姿勢を示したバトン・ルージュとは異なった。乗客の急減によって経営困難に直面した民間のバス運営会社は

MIA との交渉に意欲を見せるが、市当局は一向に動こうとしない。大規模なストライキなどとは異なり、ボイコットで地域経済に与えられる打撃は、現実のところそれほど大きくはない。そして、ボイコット開始1カ月後、黒人市民との合意に達したとする市当局のでっちあげ工作がMIAによって裏をかかされると、面子を潰されたかたちになった市当局は態度をいっそう硬化させることになる。ウィリアム・ゲイル市長は、MIAを「ニグロのラディカルたち」と呼び、その最終的な目的は「われわれの社会の慣例を破壊することにある」と宣言、ボイコットが先に停止されない限り、将来の交渉はないと断言するに至り、MIAと市当局との交渉は完全に途絶したのであった⁹。

このようななか、当時の南部では、ブラウン判決によって目前に迫った公立学校の人種隔離撤廃へは強く反撥するものの、KKKなどの秘儀的組織との関与を快く思わない者たちが結成した白人市民会議（White Citizens' Council）が勢力を急伸させていた。ゲイル市長、ならびにクライド・セラーズ公安委員長は、その公然としたメンバーだった。彼らは、モントゴメリー市で開催された、このときまでの白人市民会議の歴史上最大の集会で演壇に立ち、なかでもセラーズは「州権と白人至上主義の維持、これをわれわれの闘争のスローガンに！」と、12,000名の大観衆を前にアジ演説すら行っていた。このような行動は、さらに過激な人びとを後押しする結果となり、1月30日にはキングとそのほかMIA幹部の自宅に爆弾が投擲される事件が勃発することになったのだった¹⁰。

このときの爆破現場に集まった興奮した支持者を前にしたキングの言葉が、一般に彼が初めて「非暴力」を訴えたもののだとして、今日まで伝えられることになっている。しかし、これと同じく重要なことは、同日のMIA幹部会で起きていた。「分離すれども平等」の枠内での改善を求めた従来の姿勢から一転、人種隔離そのものを係争点とする違憲訴訟提訴へ方向を転換していたのである。

そして、結果としてボイコットを勝利へと導いたのは、1956年11月13日に下された、MIAの主張を認める連邦最高裁判決だった。他方、この判決と同日、最高裁の違憲判決より少し後れて、アラバマ州裁判所では、MIAのカー・プールが公共交通事業を妨害しているとして市側が請求した差し止

め請求が認められていた。こちらの決定が最高裁判決より先に下されていたならば、バスに戻る黒人市民も増加し、ボイコットが敗北している可能性はきわめて高かったはずである。

広く読まれたキングの回顧録『自由への大いなる歩み』のなかにこのときのアラバマ州裁の模様が記されている。そこには、傍聴席に座った黒人市民が、連邦最高裁判決を知り、「ワシントン DC から全能なる神が語られた」と叫び声をあげる活き活きとした描写がある¹¹。「時間差」で運動の帰趨が決まったことを伝える、スリリングでドラマティックなシーンではある。しかし、現実はこの判決を記したのは、全能の神ではなく9人の判事であった。キングは、このことをおそらくはっきりとわかっていたに違いない。

しかし、このように述べることで、先行研究が強調してきた、MIA 指導層の創意工夫やブラック・コミュニティの強力な連帯を軽視する意図は筆者にはない。むしろ本稿の関心にとってより重要な問題は、現実として最高裁判決が大きな役割を果たした運動であるにも関わらず、非暴力という闘争手段やコミュニティの連帯がことさら強調されているところにある。

ブラック・コミュニティには市当局に交渉を迫る「パワー」がなかった。モントゴメリーでの運動の推移が素直に伝えているのは、むしろこの事実なのだ。

ところで、これからおよそ10年後、ブラック・パワーを提唱し始めた黒人ラディカルズたちは、このような議論を展開した。黒人には「白人の権力体制 white power structure」に対し譲歩を迫る「パワー」がない、だからこそ黒人は内部の分裂を取り去り一致団結することでそのパワーを創出しなければならない¹²。興味深いことに、このような「パワー関係の認識」は、保守的な黒人指導層が従来主張していたものと同じである。たとえば、全国黒人向上協会 (National Association for the Advancement of Colored People, NAACP) 執行委員長のロイ・ウィルキンスは、マイノリティに過ぎない黒人によるボイコットという手法では、マジョリティである白人からの譲歩は勝ち取れないとする立場にたち、直接行動よりも法廷闘争やロビー活動を重視する路線を採っていた¹³。NAACP が可能なかぎり直接行動を忌諱した所以である。

また、ボイコット運動の期間中、非暴力運動の眼目とされる「敵の良心の目覚め」などなく、強権的弾圧は衰えを知らなかった。人種関係は改善されるどころか、緊張の度合いを一段と強め、運動のシンボルであるローザ・パークスは、運動終結後、デトロイトに移住せざるを得なかった。これらの一連の事情を考えると、その後のブラック・パワー主義者の主張を、一概に絶望的で非現実的なものだと断定することはできないのは明らかであろう。

ボイコット運動終結後の短い運動停滞期が終わって1960年代になると、大衆運動としての黒人の運動は急速に激しさを増していった。しかし、その多くは、所期の目標を達成していない。たとえば、1961年にキングが参加したジョージア州オルバニーの運動では、地方官憲によって巧妙に暴力的衝突が回避され、連邦権限に関わる係争点を欠くなか運動は長期化し、何ひとつ具体的な成果を上げることなく終わっている¹⁴。

この運動の経緯を踏まえて、次にキングの非暴力思想をみてみよう。

白人至上主義者の弾圧激化、わけてもMIA指導層宅への爆弾投擲は、モントゴメリーという地方都市の運動を全国に知らしめるものとなり、運動への支援を拡大させる結果を生んだ。このとき、モントゴメリーへ急行した者のなかに、ベイヤード・ラスティンがいる。キューカーの家庭に生まれたラスティンは、1930年代に共産党系青年組織に加わったのを嚆矢に政治運動を始め、その後独ソ開戦によって共産党の方針が転換されると、国際的パシフィスト組織の友和会（Fellowship of Reconciliation）へ活動拠点を移し、戦後は徴兵拒否運動などに従事した人物である¹⁵。彼が発起人のひとりに名を連ねて結成されたのが、1960年代にはSNCCとともに公民権団体のなかでも最も急進的な翼を担うことになる人種平等会議（Congress of Racial Equality, CORE）であり、それは1942年に遡る。つまり、モントゴメリーでの運動が興隆したとき、ラスティンは、いわば「筋金入りのパシフィスト」として、すでに20年近い経歴を持っていたのだった¹⁶。南部で始まった原初的な非暴力の運動を、パシフィズムのしっかりとした哲学に基礎づけよう、それがモントゴメリーに向かったラスティンの目的であった¹⁷。

このラスティンや、彼のあとにモントゴメリーに到着した同じく友和会のパシフィスト、グレン・スマイリーは、しかし、キングの教会の地下に大量

の武器が蓄えられていることに仰天することになる。キングらが武装していたのも無理はなく、南部において非武装を貫くことは、人種間緊張が高まったなかでは自殺行為に等しいことだった。実のところ、キングは、スマイリーに対し、「ガンディのことは、ほんとうのことを言って、あまり良く知りません」とうち明かしてもいた¹⁸。

もとより、友和会や CORE がインドの事例からアメリカに応用しようとした非暴力主義は、敵対する相手の改心をあくまでも目的とし、運動参加者たちの精神的鍛練のために「アシュラム」での共同生活を必須とするなど、非暴力へのホリスティックなアプローチとリゴリズムを特徴とするものだった¹⁹。当然予測されるように、このような非暴力主義のブラック・コミュニティへの浸透は難しく、結成直後の CORE は、皮肉にも当の黒人からの支持調達に失敗し、それが大きな原因となって勢力拡大に失敗していたのである²⁰。

他方、キングは、非暴力を、生活を律する哲学としてよりはむしろ、世論喚起のための手段として認識していた。神学の学徒としてラインホルド・ニーバーの影響を強く受けたキングは、人間の善性を強調するパシフィズムを「絶対的パシフィズム」と呼び、それへのはっきりとした反対姿勢をとっていたのである。パシフィストたちは「人間に関する根拠のない楽観論」を信じており、「無意識のうちに独善的になっている」のであって、「人間の罪深さ」への理解が足りない、こうキングは考えていたのだ。そのような彼にとっての課題は「リアリスティックなパシフィズム」を鍛えあげることだった²¹。

キング研究の第一人者で歴史研究者のデイヴィッド・ギャロー、社会学者のアルドン・モリス、政治学者のマイケル・クラーマンらも指摘しているように、実際のところ彼の非暴力主義は、公民権法制定につながったバーミングハム闘争にしても、同じく投票権法のセルマ闘争にしても、激しい白人至上主義者の反撥が予測される場所を取って標的にし、暴力的な反応を意図的に挑撥するものであった。初期の CORE が非暴力による「説得」を強調していたのと同様に、それは、「非暴力的挑撥 nonviolent provocation」や「非暴力的対決 nonviolent confrontation」と呼ぶのがふさわしいものだった。

た²²。

カーマイケルがキングから「対決の手法」を学んだというのは、この意味においてである。

それゆえに、同時代にあってのキングは、度重なり白人穏健派から自制を求められ、非暴力に徹したデモであってもしばしばその中止を迫られていた。1963年、投獄された刑務所で著した「バーミングハムの牢獄からの手紙」のなかで、キングが「黒人にとっての躓きの石はKKKではなく、白人穏健派である」と述べねばならなかったのも、このような経緯があってのことだった²³。しかも、このときのバーミングハム闘争では、運動指導層の投宿先や自宅が爆破されたのを契機に大規模な暴動が発生していたし、運動拠点となっていた黒人教会爆破事件では4名の少女の命が失われていた。運動は、非暴力よりもむしろ暴力によって彩られていたのである。それでもなおかつ公民権法案は議会通過の目処が立たず、頻発する人種テロは人種統合の際に予測される混乱の証拠として、むしろ法案通過を邪魔することになっていた。この1963年の夏はまた〈仕事と自由のためのワシントン大行進〉が開催され、アメリカのリベラル勢力の結集が図られた年でもある。しかし、この行進の指導層は、行進からわずか2カ月後の10月（教会爆破の翌月）になると、公民権法制定にきわめて強い疑問を抱くようになり、夏の行進の成功が人種間協力の新しい時代の幕開けを告げたという希望を完全に捨て去るようになっていたのだった²⁴。

他方、1960年の結成当初のころのSNCCは、もちろん非暴力のリゴリズムから大きな刺戟を得ていた。しかしながら、この組織に集った黒人青年たちにしていても、非暴力に忠実なあまり、白人リベラルズの離反にあったときの絶望はかえってよりいっそう深いものになり、それがその後の分離主義への傾斜の遠因となっていく。彼らが結成を助けたミシシッピ・フリーダム民主党がリベラルズの離反によって正式な民主党代議権を得られなかったことなど、肝心のところで白人リベラルズがまったく頼りにならず、むしろ彼ら彼女らの進路を妨害したという経験が、深い不信を生んでいったのである。そもそも〈仕事と自由のためのワシントン大行進〉の際に、「連邦政府はどちらの味方なのか」というSNCC議長演説に難色を示し、その内容

のトーンダウンを迫ったのも、白人リベラルズにほかならない²⁵。黒人青年のラディカルズとリベラルズの対立は、60年代半ばに突如として起きたのではなく、それは散発的な衝突を繰り返しながら、運動の水面下につねに存在していたのだった。

SNCCの南部での活動は、草の根の人びとのエンパワメントを達成したとする評価が高い。それではこの団体が主導した運動で、同時代の短期的な枠組み、つまり運動家自身が具体的達成感を得られる時間枠のなかで、何か確たる「勝利」を収めたものがあるかと問うと、公共施設の人種隔離の撤廃の他に例証できるものは少ないであろう。ケネディ政権から間接的に運動資金の支援を受けた有権者登録運動にしてみても、南部州政府や白人至上主義者の抵抗に直面するなか、一向に成果は上がらなかったのが実情である（この事情を変えたのは1965年投票権法であり、SNCCの運動の直接的な成果ではない）。

このような時代情況から浮かび上がる運動の現場は、キングの「私には夢がある」の演説を中心に言祝がれる、非暴力としての公民権運動のシーンとは著しく異なる。ところが、1960年代前半の公民権運動を語るのに、非暴力は今日もまだその中心性を失ってはいない。このように史実とは離れて公民権運動の非暴力性が殊更強調されること、それは、その後の運動にとって、正当な運動、アクセプタブルでリスペクタブルな運動の敷居を高くすることにつながっているのではなからうか。世論を動かしたのは非暴力の活動家の愛だけではない。そこには人種主義的暴力が厳として存在していた。SNCC急進化のターニングポイントとなった1964年の夏、ミシシッピ州だけでも、彼ら彼女らが関連したプロジェクト関係者の35名が狙撃、80名が暴行を受けて負傷、死者は3名を数え、地元警察や検察はおぎなりの捜査しか行わなかった²⁶。ここで忘れてならないのは、暴力には犠牲者がいたということである。活動家たちがトラウマを抱えなかったはずがない。

ブラック・パンサー党

ここまでの議論は、公民権運動史を専門とする研究者にとって、すでに耳

慣れた議論の繰り返しであったかもしれない。しかし敢えてこれを確認したのは、60年代後半の運動を考察するにあたり、その前半をいかに捉えるかがきわめて重要な意味を持つと思われるからである。以上の論点を踏まえたうえで次にみるのが、一般的には暴力的分離主義者と認識されているブラック・パンサー党の活動である²⁷。

1966年秋、カリフォルニア州オークランドの学生、ヒューイ・P・ニュートンとボビー・シールによって結成されたブラック・パンサー党は、都市黒人ゲトーで急速に勢力を拡大し、ブラック・パワー運動を先頭で牽引していくことになった。同党がこのような人気を博すきっかけとなったのは、武装自警団を結成しブラック・コミュニティでの警官暴力（police brutality）を監視するコミュニティ・パトロールにあり、結成当初、正式にはBlack Panther Party for Self-Defenseと名乗った。1967年5月、カリフォルニア州議会議事堂で重武装したパンサー党員が傍聴を求めるデモンストレーションは、ロナルド・レーガン知事の議事堂前での会見と重なったことで都合良くテレビ放送され、このときまでオークランドの黒人ゲトーの自警組織に過ぎなかった同党の存在は一躍全米に知れ渡った。同党の活動は、都市人種暴動の頻発という時代情況のなかで展開され、漆黒のレザージャケットにショットガン、肩と腰には弾倉ベルトという、マッチョで戦闘的な出で立ちの男性党員イメージが広まるなか、黒人運動の暴力的転回の象徴ともみなされていった²⁸。ほどなくラディカルな青年組織としての同党の世評は、都市に活動拠点を欠くSNCCを凌駕する²⁹。

ブラック・パンサーたちに関するイメージは、この衝撃的な登場のときのものが今日まで根強く残り、そこで凍りついたままになっている。人びとは、「陰の内閣」を組織して仰々しいタイトルを持つ党幹部、ニュートン防衛大臣（Minister of Defense）、シール議長（Chairman）、エルドリッジ・クリーヴァー情報相（Minister of Information）たち——彼ら3名は、60年代後半のアメリカで「時代の寵児」にもなった——がストリートを闊歩し、固く握りしめた拳を高く突き上げながら、人種主義と「アメリカ帝国主義」を罵倒する模様を想定してしまう³⁰。しかし、これほど史実を単純化し、誤解したものはない。

パンサー党の党勢は1969年からその翌年にかけて最盛期を迎えるが、このときすでに同党の活動の実態は結成時のそれから大きく変化していた。カリフォルニア州議会でのデモンストレーション後、銃器の携行所持を困難にする法律が可決され、コミュニティ・パトロールは停止を余儀なくされていた。さらに1967年10月28日未明、警官から職務質問を受けたニュートンは、警官の捜査権限を問い質して乱闘となり、白人の警官1名を射殺したとして殺人罪で逮捕・起訴される。この5カ月後の1968年4月、キング暗殺に伴う全米の混乱のなかで、クリーヴァーは、警官を襲撃する暴挙に出る。ちなみにクリーヴァーは当時を振り返りこう語っている。「われわれにとってキングの死がすべてだった。交戦なしに目的を達成できるという神話が不毛だと、もう一方の頬を差し出したときに響くのはプランテーション所有者の鞭の音だとわかったのだ」³¹。その後の彼は、仮保釈から公判開始までの間に行方をくらまし、最終的にはアルジェリアに亡命するに至る。さらには1968年8月、シカゴ民主党全国大会では反戦デモ隊とシカゴ市警のあいだで大規模な衝突が起き、その騒乱のなかでシールも逮捕されて暴動教唆罪に問われる。つまり、1968年の夏を境に、パンサー党初期のリーダーシップは党運営への関与ができなくなっていたのだった。

この初期のカリスマ的男性リーダーたちの不在が、翻って党活動の変化を促していった。このときに党活動の中心に据えられたのが、〈子どもたちへの無料朝食配給活動〉や〈鎌形赤血球貧血症診察のための無料クリニック〉といったコミュニティ活動だった——パンサーたちはこれを「サヴァイヴァル・プログラム」と呼んだ。すなわち、防衛的・抵抗的なもので手一杯であり、クリーヴァーなどが喧伝していた革命などは、とうてい真面目に考えられる課題ではなかったのである。そして現場の活動を担っていたのは、武装自警団ではなく、子供たちに朝食を配給し、医療クリニックの訪問者をケアする女性党員やそのサポーターたちだったのだ。これに伴って彼ら彼女らの戦闘的なレトリックもトーンダウンしていった。このころのパンサー党の活動を報じる『ニューヨーク・タイムズ』の記事の見出しは、適切にも「パンサーたち——彼ら彼女らはおなじ組織ではない」と打たれている³²。

このサヴァイヴァル・プログラムに加えて、この時期のパンサーには、

そのほか二つの中心的なプログラムがあった。ニュートンの解放を求める〈ニュートン釈放要求運動〉とベトナム反戦運動である。

ニュートンが逮捕されたとき、彼自身も重傷を負うことになったのだが、これを報じる写真(写真1)は、病院に運び込まれたニュートンが担架の上に手錠で縛り付けられた様子を、逮捕者の容態に無頓着な白人の警官の姿とともに収めていた。このような逮捕現場の不当性と暴力性を暴くような報道が、〈ニュートン釈放要求運動〉の拡大に弾みを与えることになった。官憲からの訴追を受けるパンサー党員たちは「政治犯」として理解されたのである。

このころ、パンサー党への支持を表明した組織のなかには、たとえば南アフリカのアフリカ民族会議(African National Congress, ANC)なども加わり、同党の活動は国際性を帯びていくことになった。パンサー党機関誌『ブラック・パンサー』に掲載されたANCの書簡は「第三世界」の連帯を謳いながら、こう述べている。

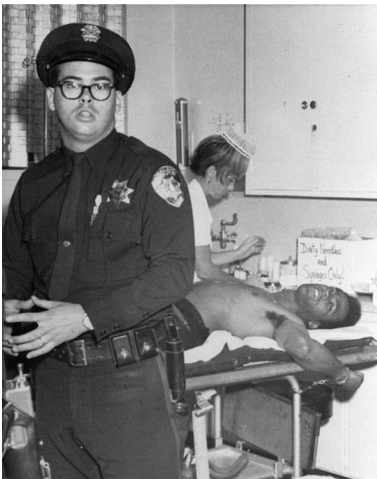


写真1

Source: Bloom and Martin, Jr. [2013: 165]

あなたたちの闘争とわれわれの闘争は、ベトナム、中東、そして多くの第三世界で現在繰り広げられている帝国主義に抗する大きな国際的闘争の一部をなしている。それゆえ、われわれは、ボビー同志とヒューイ同志の釈放を要求するあなたたちの運動に対し、躊躇することなく連帯の意を表明する。これに加え、われわれの共通の敵、ファシスト・レイシズムに対するブラック・パンサー党の生死を賭けた闘争との連帯の意も表明する。われわれの要求もあなたたちのそれと同じである、このことの意義は大きい。すべての権力を人民に!³³

このように、パンサー党の活動の射程は決してアメリカ合衆国の国境

のなかに止まるものではない。同時期、国際的な拡がりを獲得したパンサー党支援の輪は、植民地主義との現実の反植民地闘争に従事している「第三世界」だけでなく、欧州や東京や大阪にも及んでいた³⁴。

このような人種・エスニシティを超えた連帯は、もちろん国外だけで見られるものではなかった。ブラック・パンサー党の活動は、「アメリカ国内における国際主義」を推進していくことになる。ブラック・パワー運動がアメリカのさまざまなマイノリティの人種やエスニシティを紐帯とする組織化と権利要求を活性化させたことは広く知られていることである。ブラック・パンサー党の活動の現場では、「抑圧されたマイノリティ」との共闘は一般に広く見られた現象であった。シカゴやニューヨークではプエルトリカンをはじめとするラティーノスとの共闘が積極的に追求されていた（その後、1984年の民主党大統領予備選に立候補したジェシー・ジャクソンによって広められる多文化・多人種的政治連合の呼称「虹の連合」は、そもそもパンサー党シカゴ支部長で党副議長であったフレッド・ハンプトンによって最初に用いられたものである）。党本部があるオークランドの場合、隣接するバークレーのアジア系学生組織、アジア系アメリカ人政治同盟（Asian American Political Alliance）との関係はきわめて緊密であり続けた³⁵。

この間、現場のパンサー党員たちは、リーダーシップの不在を埋めるため、公民権運動のラディカルズとの連携を模索し、SNCCに組織統合を提案していた。ところがしかし、分離主義への傾斜を強めたSNCCと、反戦運動との共闘を選択したパンサー党の懸隔は大きく、1968年夏に対立が表面化した結果、公表されていた合併は、実質的成果を何もあげられないままで頓挫することになった³⁶。つまり、パンサー党が分離主義でなかったからこそ、SNCCとの共闘は不可能だったのだ。

となると、パンサー党の盛期は、カリスマ的男性リーダーシップをつねに欠くなかで展開されていたことになる。一般の想定とは異なり、むしろ皮肉にもこの不在こそが、実際には党勢拡大の原因でもあったのだ。

写真2は、まだSNCCとの関係が良好だったころのパンサー党が、1967年2月にオークランドで開催した合同集会の様相である。「黒人解放運動」へのパンサーの登場を画すこの大集会の演壇は、よく吟味すると実はマッ



写真2

Source: Roz Payne Archive and Newsreel Film, What We Want, What We Believe: The Black Panther Party Library [DVD], AK Press Video



写真3

Source: Ibid

チョなパンサー指導層の不在を明確に伝えていることにアクセントがあるものである。カーマイケルを左に、シールを右にし、中央に置かれた籐の椅子にはニュートンが本来座しているはずなのだが、もちろん彼は獄中にあり、ここは空席となっている。この場に集った人びとは、会場に大きく掲げられた彼のマッチョなイメージ写真——写真3、意図的にエキゾチックな装いを施すことでアフリカ系アメリカ人の迫害に対する抵抗を演出した写真——を重ねて、この場を読み取っていたのだった。このニュートンの写真は、赤と黒で描かれたチェ・ゲバラのイラストと同様、当時のアメリカできわめて広範に流布し、時代の象徴ともなったものである。

パンサー党の党勢の拡大は、現実にはこのようなマッチョなリーダーの不在と、さらにはその不在がシンボル化されるなかで起きていたのだ。そして、人びとは、かかる不在の空間に、いわゆる「アメリカ帝国主義」と人種主義、そしてその暴力の痕跡を読み込んでいたのである。

このころ、白人青年を中心とするニューレフトの側もパンサー党との連携を強め、ニューレフトの運動課題のなかで、〈反戦〉と〈政治犯釈放要求〉はふたつの大きなテーマとなっていた。パンサー党が中心となった最大のキャンペーンは、このような流れのなか、コネティカット州ニューヘイヴンで繰り広げられることになる。

1969年5月のニューヘイヴン、アレックス・ラックリーという名前のパンサー党員が仲間の党員に殺害されるという事件が起きた。このラックリー殺害事件は、ジョージ・サムズという党員が中心となり、ラックリーに対し政府の内通者であるという嫌疑をかけて遂行される「私刑」として実行されたものであった。その「犯罪」の克明なプロセスは、奇しくも事件の中心人物サムズを通じて明らかにされることになる——同年8月にサムズが別件で逮捕されると、ラックリー殺害の実行犯に13名の党員の名前を挙げたのだ。なお、サムズは、この証言によって減刑を受けており、連邦捜査局（Federal Bureau of Investigation, FBI）のスパイであったと指摘する研究は多い³⁷。このときサムズが共謀者としてあげた者のなかには仮保釈の身であったシールまで含まれており、ここに至ってパンサー党は、最後に残った結成当初の幹部すら投獄される危険に直面することになったのである。

そこでパンサー党は、これを不当な政治的迫害であるとする主張を展開し、同年秋よりイェール大学の学生組織との連携共闘を模索していった。学生組織は、政治的・人種的緊張が高まっているなかでの裁判は不当であり、これを中止すること、ならびに近隣のブラック・コミュニティとの関係を改善する大学プログラムの開始を要求、授業のボイコットを辞さない構えをとり、パンサー党とともに、広く参加者を集めて5月1日に大抗議集会を開催することを呼びかけた。やがてこの動きにはトム・ヘイドン、アビー・ホフマン、デイヴ・デインジャーらの白人ラディカルズたちが加わり、暴動を怖れたコネティカット州知事が連邦軍の派兵を要求する事態へと発展していった³⁸。

このときまでに学生やパンサー党員を支持する動きは、白人ラディカルズや学生たちに限られたものではなく、NAACPなどのメインストリームの公民権団体にまで広がっていた。というのも、地方警察やFBIとの衝突で死亡したパンサー党員は少なくとも28名に達し、〈国家による弾圧〉を懸念する声が高まっていたからである。その後の1976年、ウォーターゲート事件による政府の諜報活動に関する関心の高まりが連邦上院による調査を促したとき、そのなかで明らかになっていったのは、1960年代後半から70年代初頭にかけての連邦政府による黒人組織の弾圧だった。FBIによる黒人ラディ

カルズに対する諜報作戦、「国家破壊活動防止諜報作戦 Counterintelligence Program, COINTELPRO」は、1969年になるとそのほとんどがパンサー党に向けられたものになり、ブラック・ナショナリスト組織を対象とした295オペレーションの作戦のうち233が同党を対象としたものであった³⁹。同時代にあっても、公民権指導層はこのような動きを察知しており、かつてはブラック・パワー運動を全面的に否定したロイ・ウィルキンスたちも、強い懸念を表明せざるを得なかったのである⁴⁰。

このような状況の4月24日、イエール大学総長キングマン・ブリュースターは、「いずれの場所であろうとも、合衆国のなかにおいて、黒人の革命家が公正な裁判を受けることに対して疑念」を抱いているとする声明を発表する。この発言が広く報道されると、それはスピロ・アグニュー副大統領の逆鱗に触れた——彼は、「ブリュースター総長のもとでは学生たちがアメリカに対する公正な印象を持つようにはなれ」ず、「より熟達した責任感のある」人物によって率いられるようにイエール卒業生は大学に要求すべきであると、間接的に総長の退陣を要求したのだった⁴¹。すると、今度はこのような政権担当者の言動にイエール大学の教員たちが強い反撥を示す。ストの支持はしないが、授業を開講するか否かは教員個人の判断に任せるという決議を採択するに至ったのである⁴²。その結果、5月1日の大集会は15,000人を集める大規模なものになっていく⁴³。

1970年5月初頭はまた、カンボジア侵攻に反対する学生ストライキが、学生運動としてはアメリカ史上空前の規模に拡大した時期にあたる。パンサー支援に端を発したイエール大学の抗議は、この運動へと合流し、それは最終的にオハイオ州ケント大学で4名、ミシシッピ州ジャクソン大学で2名の学生の命が失われる悲劇へとつながっていった⁴⁴。

ニクソン大統領が学生活動家を「甘やかされた馬鹿者」と断罪し、対してインドシナ半島にいる兵士のことを「偉大なアメリカン・ボーイ」と称え、彼の言う「サイレント・マジョリティ」へ訴えかけたのは、ニューヘイヴンでパンサー支援の大動員が催された当日であり、もっぱらこの集会を念頭においてのことだった。彼はこう述べたのである。

大学キャンパスで大騒ぎしているあの甘やかされた馬鹿者をみてください。今日大学のキャンパスにいる坊主たちは、最良の大学に通える、世界で最も幸運な者たちです。にもかかわらず、書物を焼いては、この問題 [カンボジア侵攻] で大騒ぎしている。何と言えがいいでしょうか。この戦争を止めたら、きっとほかの戦争が起きるでしょう。他方、彼の地では自らの義務を果たしている少年たちがいます。背筋はまっすぐ、彼らは誇らしい顔つきをしている。彼らだって恐ろしいでしょう。わたしが戦争に行ったときだってそうでした。しかし大事な時が来たならば、さっと立ち上がったのです。耳を傾けなければならないのは、このような男たちです。彼らは立派に務めを果たすでしょうし、我々は彼らの後ろ盾とやらなくてはなりません⁴⁵。

このニクソンの発言は、当時の問題を巧妙にフレームワークしていた。ここで対比に使われ、ニクソンが褒め称えているのはインドシナ半島の兵士たちだが、「法と秩序」に訴えるニクソンの一貫したレトリックを考えると、「アメリカの夢のために闘った非暴力の公民権運動家」も、テキスト以外のところでまちがいなく覆い重なっており、それは反戦運動=黒人ラディカルの大義をことさらカオティックでヴァイオレントなものとして捉える言説のなかで機能していた⁴⁶。たとえば、5月の集会への準備段階として、イェールの学生組織がパンサー裁判について近隣の住民と討議する機会を催したとき、ある「年配の移民」の男性は、学生たちの行動を咎めながらこのように述べていた。「わたしは今日のアメリカに誇りが持てない。ここにやってきたとき、アメリカは違っていた。何も差別が良いと言っているわけじゃありません。でも黒人たちは手に負えなくなっているじゃないですか。わたしはそのことに反対しているのです。通りを歩くことだってできやしない」⁴⁷。ニクソンの発言がこのようなセンチメントと共振していたのはまちがいない。興味深いことにまた、本稿の冒頭で紹介した、公民権運動の記憶から対決姿勢が抹消されていることをカーマイケルが非難したのは、これと同じ時期になされたものである。

ところが一方、このニューヘイヴンでの動員のあいだ、パンサー党の活動はきわめて非暴力的なものに終始し、5月1日の動員にあたっては、クラウド・コントロールを大学警備当局との連携の下で担当していた。むしろ彼ら

彼女らは、カンボジア侵攻のニュースが群衆に伝わるならばコントロール不能の状態に陥るからと、意図的にニュースの伝達を遅らせる行動すらとっていた⁴⁸。彼ら彼女らは、ミリタリストイックでもなければ、ましてや都市に潜むゲリラ戦士などではなかったのだ。

おわりに

その後、シンボルとして存在していたニュートンは、刑事審理手続上の問題で無罪を宣告され、1971年8月に釈放されることになる。しかし、そのニュートンは、現実の個性の弱さと魅力の乏しさと周囲を落胆させてしまう。実在するニュートンは、彼が獄中にあるあいだに党に加わった者たち——釈放時にはこれらの新党員が全体の過半数以上を占めていた——が描いた人物像とは異なり、カリスマ的運動リーダーのイメージとはほど遠く、大群衆を前にして激烈なアジ演説を行うよりも、むしろ大学のゼミ室で抽象的な議論を好む人物だったのである⁴⁹。

他方、アルジェのクリーヴァーは、アルジェリア政府が彼らをアメリカ合衆国の「公使代弁」として遇したのに伴ってパンサー党国際部を同地に創設、オークランドの党本部とは別の活動を開始していた。アメリカ国内の政治状況から一定の距離を得たクリーヴァーの言動はいつそう大胆になり、武装革命を主張した彼とニュートンとの対立は深まっていった。1971年初頭、両者はテレビ番組放映中に激しい口論となり、互いが相手を「追放」に処するなか、党はクリーヴァー派とニュートン派に分裂することになった⁵⁰。

このようなパンサー指導層の対立は、これを利用するFBIの工作が加わったことで、急速に悪化の一途を辿った。このときのFBIの工作は「過激な言動の弾圧」に止まらない。サヴァイヴァル・プログラムですら潜在的に危険なものとして捉え、むしろこれを標的にすることで公民権メインストリームとブラック・パンサー党のあいだにくさびを打ち込んでいったのである。J・エドガー・フーヴァー長官は、部下のエージェントにこのような通達を送っている。

諜報活動に従事している捜査局員は〈子どもたちへの無料朝食配給活動〉のようなコミュニティの利益に資するプログラムを攻撃するべきではない、そう貴殿は述べています。貴殿は、その理由として、このプログラムへの教会の活発な参加だけでなく、白人黒人を問わず、多くの著名な「人道主義者たち」が賛同しているという事実を挙げています。だとすると、貴殿は何が重要なのかまったくわかっていません。諜報活動におけるわれわれの最も重要な目的のひとつは、白人と黒人コミュニティの穏健派と党とを分かち、党を孤立させることにあるのです。〈子どもたちへの無料朝食配給活動〉を通じて、事情に通じていない白人や黒人の穏健派から党が積極的な支援を得ようとしているならば、なおさらこの点が強調されなくてはならないのです⁵¹。

注目すべきは、ここには本稿前半で強調してきた暴力と質的な変化が現れていることである。南部の公民権運動が対峙したのは、籬がはずれた白人至上主義者のテロだった。ところが、ブラック・パワー主義者に加えられたそれは、国家の機関による意図的な組織破壊プログラムだったのである。多くの党員が20代前半と若く、南部公民権運動経験者のような現場での熟練も欠くなか、彼ら彼女らがこのような強権的弾圧に、ときにはきわめて微弱であり、また別のときには無謀な抵抗しかできなかつたとしても、無理らしからぬことである。最初期パンサー党が誇示したミリタリストティックな態度に関し、黒人指導層の多くは、それが不用意に弾圧を誘発するものとして危惧していた。カーマイケルは、そのなかのひとりである⁵²。事態は彼らが危惧した通りに進展し、国家の暴力は熾烈を極めるばかりか、パンサー党の活動に非合法性とギャングスタリズムのスティグマを着せることに成功したのであった。

さらにまた、活動の拠点を海外に移した者たちも、米中接近の過程にあったアメリカ外交の機微など、当然のことながら知る術がなく、彼ら彼女らが主張した第三世界の連帯と「アメリカ帝国主義」の打破は単なる夢に終わった。ベトナム和平合意後の反戦運動が低調になるのもまた当然の成り行きであり、ニュートン釈放は皮肉にも「黒人革命家の公正な裁判は可能だ」という信憑を高めることにもなった。リベラルズや左翼からの支援の先細りとその途絶、ここにおいてもまた、黒人ラディカルズたちは孤立を余儀なく

していった。そして、1971年8月、FBIは「ブラック・コミュニティ、ならびに全国でのパンサー党の影響力は絶えた」と結論するに至る⁵³。

この間、カーマイケルは、ギニアに活動拠点を移し、ディアスポラの黒人を政治的に糾合すること、具体的にはガーナとギニアを中心とする汎アフリカ主義、ンクルマ主義を拠り所とする運動の再構築を目指した。しかし、ンクルマがすでに失脚していたことを考えると、彼の運動は中心的な地政学的拠り所を欠き、それゆえとてつもなく大きな困難に直面せざるを得なかった。

カーマイケルの方針はまた、汎アフリカ主義がマーカス・ガーヴィーやW・E・B・デュボイスによって提唱された20世紀初頭から1920年代、さらには労働運動家や左翼運動家たちによって模索された1940年代とは異なって、公民権法制定後のアメリカ黒人の運動の拠り所のなさを受けたものであった感を否定できない。歴史家ペニー・ヴォン＝エッセンらの研究が明らかにしているように、第二次世界大戦から終戦直後にかけて、アフリカ系アメリカ人の公民権運動とアフリカの脱植民地化・独立運動との関係は、たとえばアフリカ問題会議（Council of African Affairs）や産業別会議（Congress of Industrial Organizations）左派の活動などに代表されるように、具体的な人的関係と密接なコミュニケーションに基づくものであった。しかし、冷戦の激化に伴うアメリカ国内における左翼活動家の「封じ込め」が、このような活動が展開できる空間をきわめて狭隘なものにしてしまう。このときに生まれたのが、人種主義を「アメリカのディレンマ」として捉え、アメリカ黒人が求めるものを「アメリカの夢」と同一視する、愛国主義としてのアメリカ公民権運動である。このような運動の在り方は、1964年公民権法、1965年投票権法が「ディレンマ」の根源たるジム・クロー制度を葬り去ると、かえって運動が依拠する道義的な基盤を脆弱なものにしていった。問題はすでに解決済みとされたのである。ブラック・パワーが叫ばれたのは、この時点であった。このとき、ブラック・パワー主義者たちは、「わたしにアメリカの夢は見えない、わたしが見るのはアメリカの悪夢である」と論難するマルコムX、さらにはフランツ・ファノンの革命思想に影響を受け、アメリカにおける人種問題を、アメリカン・リベラリズムの単なる機能不全としてでは

なく、むしろかかるリベラリズムに内在する植民地主義の一形態、すなわち「内国植民地」という観点から再定義し、再び「アフリカ」との紐帯を模索し始めた⁵⁴。しかし、このとき彼ら彼女らは、黒人の抵抗思想や運動の遺産を素直に継承するというよりも、冷戦で断ち切られた紐帯を改めて結び直すことから始めなくてはならず、その課題はとてつもなく大きなものになっていたのである⁵⁵。

その後、パンサー党員たちのなかには、選挙政治への関与を深めるものが現れ始めた。パンサー党の全国的影響力が絶えたと判断された2年後の1973年、男性リーダー不在のなかパンサー党の実務を指揮してきたイレーン・ブラウンは、オークランド市議会に立候補し、泡沫候補とみられた当初の予想に反して次点の得票を挙げることに成功、1976年大統領選挙民主党予備選ではジェリー・ブラウン州知事の選挙参謀として活躍することになる。さらにまた、重武装の地方検事局捜査官の夜明けの急襲によって党幹部2名が殺害されたシカゴでは、1983年、同党幹部のひとり、ボビー・ラッシュがシカゴ市議会議員に当選し、それから10年後には連邦下院選挙に勝利、現在もその職にある⁵⁶。

ちなみに、このラッシュに2000年の連邦下院民主党予備選挙で敗北した人物がバラク・オバマであり、これが彼にとっての唯一の選挙戦敗北経験となっている。そのオバマは、愚か者だけが公民権法制定以後のブラック・アメリカの進歩を否定するとしばしば語っているが、もちろん筆者もそのような「愚か者」ではない。公民権法は人種隔離を完全に違法にし、投票権法制定以後アメリカ政治は表面上一変した。「黒人大統領」の誕生はもとより、ブラウンやラッシュの選挙政治への関与とその成功も、ポスト公民権時代のアメリカ社会の変化のなかにまちがいに位置づけできる。

しかし、たとえば最もわかりやすい例をひとつだけあげて、今日大きな問題になっている「獄産複合体」の存在に人種の側面からアプローチしようとしても、それは「犯罪に寛容な社会を助長するもの」として容易にステイグマタイズされ、問題を取り上げることすらきわめて困難になっている。19歳から29歳までの黒人男性のなかで、服役中の者の数が教育を受けている者の数を上回り、一度犯罪を犯したらその後の社会復帰がきわめて難しいの

にも関わらず、このような問題と人種問題を絡め、かつてのパンサーたちが行ったように〈獄にある黒い人びと〉のことを問題にしようにも、もはや発展可能な政治連合を構築できなくなっているのである⁵⁷。このような立ち位置をとることは、アクセプタブルでもリスペクタブルでもないのだ。これもまた、ポスト公民権時代のアメリカ社会の変化だと言わねばならない。

本稿後半ではブラック・パンサー党が分離主義的でもミリタリストでもないことを強調したが、それでも同党の活動のなかには、その批判者が指摘するように犯罪としか形容できない行為や、白人の罪障感につけいる行為も散見される⁵⁸。しかし、このような過誤を再考し、そこに歴史上の意味を汲み取っていくには、60年代前半が非暴力の時代であると言祝ぐことや、その後半が暴力の時代であると掃き捨てることを止め、その二元論的言説を解体すること、そして本稿が強調した暴力の痕跡（パンサーたちの犯罪行為は、FBIや地方警察が教唆したという側面もある）を、まずは見つめ直すことが重要なのではなからうか。南部公民権運動は「愛と非暴力」に徹していたわけではないし、ブラック・パンサー党も暴力組織と括られるわけではない。公民権運動・ブラック・パワー研究に必要なのは、いまいちどこのように問いかけることから始まるであろう。What's Love Got to Do with It?—愛がいったいどんな関係があるのだ。

註

¹ Stokely Carmichael, Pan-Africanism, speech delivered at Morehouse College, Atlanta, Georgia, sponsored by the Institute of the Black World, April, 1970, in Carmichael [1971: 189].

² キングとブラック・パワー運動の関係については、次の代表的研究を参照。Garrow [1986: 483-497]. キングを穏健な指導者としてではなく、対決主義的で急進的な指導者として再考しようとする研究の代表として、Dyson [2000]。キングが急進化する SNCC に一定のシンパシーを持っていたことについては、以下の SNCC アクティヴィストの回顧録に詳しい。Sellers with Terrell [1973: 163-164]; Carmichael with Thelwell [2003: 513-514].

³ Joseph [2006].

⁴ 長い公民権運動論についての史学史的論考については以下を参照。拙稿、藤永 [2008]。

5. Cha-Jua and Lang [2007].
6. McGuire [2010]; Theoharis [2013].
7. わが国における代表的研究として、以下の浩瀚な研究を参照。川島 [2008]。またキング個人に関する研究としては、黒崎 [2002]。
8. ボイコット運動の経緯については、Garrow [1986: 11-82]; 川島 [2008: 21-36]。
9. Thornton III [1989: 355].
10. McMillen [1971].
11. King, Jr. [1958: 160].
12. 政治思想としてのブラック・パワー主義についてまとめたものとして、McCartney [1992]。
13. Wilkins [1982: 237].
14. Carson [1981: 56-65].
15. ラスティンについては、Anderson [1997]; D' Emilio [2004].
16. Meier and Rudwick [1975: 3-16].
17. Bayard Rustin Interview in Raines [1977: 52-57].
18. Garrow [1986: 68, 72-73]; Rustin Interview in Raines [1977: 53].
19. Farmer [1985: 357-360].
20. Meier and Rudwick [1975: 17-18].
21. King, Jr. [1958: 99].
22. Garrow [1978: 213-236]; Morris [1984: 82-86, 129-131]; Klarman [2004: 370-382].
23. 「バーミングハム牢獄からの手紙」が書かれた状況について、Eskew [1997: 242-245]。
24. Jones [2013]. 教会爆破事件に至るバーミングハムの白人至上主義者の活動と、それに関する連邦捜査局の連累関係、ならびに事件そのものの政治的影響については、McWhorter [2001]。
25. 黒人ラディカルズによる白人リベラルズ批判の例として、以下を参照。Stokely Carmichael, Berkeley Speech, October 1966, in Carmichael [1971: 45-60].
26. Rosenberg [2008: 82]. このSNCCが主導したミシシッピ夏期計画については、同プロジェクトに法律顧問として参加した弁護士による回顧録が、時系列的に最も詳細に記録している。Holt [1965: 207-252].
27. BPPに関する歴史研究は、2000年代に入り本格化した。これは、論争多き同組織の盛期から

一定の時間が経過したこと、運動指導層の回顧録が相継いで刊行されたこと、ならびに関連の資料に一定の整理がついてきたことによって促されている。代表的研究論集として以下を参照。Jones [1998]; Cleaver and Katsiaficas [2001]。2003年6月にはボストンのウィーロック・カレッジで、Black Panther Party in Historical Perspective と題された研究者とアクティビストたちが集うカンファレンスが開催された。以下の論集はこのカンファレンスでの報告をもとに編まれたものである。Lazerow and Williams [2006]。筆者は、このカンファレンスや、BPP アクティビストたちのリユニオンに3度参加してきた。本章の議論は、このような会合での観察と討議から多くのインスピレーションを得ている。

28. 公刊されているパンサー党の歴史研究のなかで最も包括的なものとして、Bloom and Martin, Jr. [2013]。

29. "S.N.C.C. in Decline After 8 Years in Lead" [1968]。

30. たとえば映画『フォレスト・ガンブ』（1994年）には、明らかにパンサー党員をモデルにした黒人男性が登場している。このようなキャラクターは、1960年代後半の文化的ブラック・ナショナルリズムの戯画でもあり、そしてまた今日多く公衆によって抱かれている当時の「黒人運動」のイメージでもある。1990年代にはまた、公共施設爆破未遂の冤罪で投獄されたこともあるパンサー党ニューヨーク支部の党員アフェニ・シャクールを母に持つギャングスタ・ラッパー、2Pacが、パンサー党員の「直系卑属」として往年の同党のマッシュョなイメージとミラントな政治的メッセージを巧妙に使いながら、広く人気を博した。60年代のパンサー党が、スタイリスティックなイメージを展開しながら党勢を拡大していったのもまた事実であり、それは現在に至っても、主にはヒップホップを中心にリサイクルされている。このような文化現象が孕む問題点については、以下の拙稿を参照。藤永 [2010]。

31. de Gramont [1970]。

32. "Panthers: They Are Not the Same Organization" [1969]。

33. M. P. Naicker, Director of Publicity and Information, African National Congress, reprinted in *Black Panther* [1969]。

34. 井関 [2012: 275-280]; Author's interview with Billy X Jennings (Central Committee Members of the Black Panther Party) at 40th Anniversary Celebration of Black Panther Party, October 13, 2006, Oakland, California.

35. Bloom and Martin, Jr. [2013: 290-295]; Fujino [2012]。

36. Carmichael with Thelwell [2003: 668]; Bloom and Martin, Jr. [2013: 296]。

37. ラックリー殺害事件やサムズの来歴に関しては以下の研究に詳しい。Williams [2008: 139-142, 150-158, 163]; O'Reilly [1989: 309-310]。

38. Bloom and Martin, Jr. [2013: 247-266]; "Yale Suspends 5 on Charges of Disrupting a Lecture" [1969]; "Yale Strike Urged to Back Panthers" [1970]; "U.S. Troops Flown in for Panther Rally" [1970]。

39. U. S. Congress, Senate, Select Committee to Study Governmental Operations with Respect to

Intelligence Activities [1976: 188].

40. Bloom and Martin, Jr. [2013: 241-244]. なお、ウィルキンスは、パンサー党員に対する警察の弾圧に関する独自調査に乗りだし、ラムゼイ・クラーク元連邦司法省長官と連名でその結果を公開している。Wilkins and Clark [1973].
41. "Brewster Doubts Fair Black Trials" [1970].
42. "Yale Faculty Rejects Proposal to Cancel All Classes to Support Panthers" [1970].
43. "Yale Student Petition Supports Brewster's Stand on Panthers" [1970]; "Yale to Open Gates This Weekend to Protesters Assembling to Support Black Panthers" [1970]; "New Haven Rally Ends A Day Early" [1970].
44. "Campus Unrest Over War Spreads with Strike Calls" [1970].
45. "Nixon Puts 'Bums' Label on Some College Radicals" [1970].
46. ニクソンの公民権政策一般について、O'Reilly [1995]; Kotlowski [2001].
47. "Strike Explained by Yale Students" [1970].
48. "Yale Rally Cry: 'Bulldog and Panther'" [1970]; "New Haven Police Set Off Tear Gas at Panther Rally" [1970]; "New Haven Rally Ends A Day Early" [1970].
49. "Panthers Await Newton's Return" [1970].
50. Bloom and Martin, Jr. [2013: 341-369]; "Internal Dispute Rends Panthers" [1971]; "Panthers Fear Growing Intraparty Strife" [1971]. FBI のスパイ活動の詳細については、以下の工作員の回顧録を参照。Anthony [1990].
51. Airtel, Director FBI, to Special Agent in Charge, San Francisco, May 27, 1969, in Churchill and Wall [1990: 144-145].
52. Carmichael with Thelwell [2003: 671].
53. Committee on Internal Security, House of Representatives [1971: 143].
54. ブラック・パワー主義者と内国植民地論については、Allen [1990: 6-20].
55. Von Eschen [1997: 173-174]. 愛国主義としての公民権、つまり冷戦公民権については、Dudziak [2000]. 冷戦の影響を受けた左派系労働運動の弾圧がパンサー党の活動の孤立を招来したという見解については、「長い公民権運動論」の代表的研究である以下の論考も参照。Korstad and Lichtenstein [1988: 805-806]. この時代に大きな困難に直面したブラック・パワー主義者たちは、しかし、アフリカ系アメリカ人のアフリカへの政治的関心を高めるという足跡をはっきりと残した。その後のアメリカにおけるアフリカ解放支援委員会 (African Liberation Support Committee) やトランスアフリカ (TransAfrica) の活動は、ならびに 1980 年代に盛り上がりを見せる南アフリカのアパルトヘイトに対するアメリカでの抗議運動は、その延長線上にある。ゲインズ [2012].

56. Brown [1992: 360-362, 410-416]. なお、シカゴにおける民主党マシン政治からの黒人市民の離反は、パンサー党支部襲撃を指示した地方検事エドワード・ハンラハンの再選への反対運動がひとつの大きな契機となって本格化したものであり、その後の黒人市長ハロルド・ワシントンの誕生への市民運動の興隆を準備した。Grimshaw [1992: 99, 137-138, 182-183].
57. この問題に人種の観点から切り込んだ研究として以下を参照。デイヴィス [2008]; Alexander [2012].
58. かつては『ランバーツ誌』の編集者としてパンサー党と活動をともにしたデイヴィッド・ホロウィッツは、その後同党の犯罪性を告発する急先鋒となった。Horowitz and Collier [1989]. また以下の著書もパンサー党を「政治化したギャング」として描き、大きな論争を呼んだ。Pearson [1994].

参考文献

- Alexander, Michelle. *The New Jim Crow: Mass Incarceration in the Age of Colorblindness*. New York: New Press, 2012.
- Allen, Robert L. *Black Awakening in Capitalist America*. Trenton, New Jersey: Africa World Press, 1990.
- Anderson, Jervis. *Bayard Rustin: Troubles I've Seen, A Biography*. New York: HaperCollins, 1997.
- Anthony, Earl. *Spitting in the Wind: The True Story Behind the Violent Legacy of the Black Panther Party*. Malibu, Ca.: Roundtable Publishing, 1990.
- Black Panther*. November 22, 1969.
- Bloom, Joshua and Waldo E. Martin, Jr. *Black Against Empire: The History and Politics of the Black Panther Party*. Berkeley: University of California Press, 2013.
- "Brewster Doubts Fair Black Trials." *New York Times*, April 25, 1970.
- Brown, Elaine. *A Taste of Power: A Black Woman's Story*. New York: Doubleday, 1992.
- "Campus Unrest Over War Spreads with Strike Calls." *New York Times*, May 4, 1970.
- Carmichael, Stokely. *Stokely Speaks: Black Power Back to Pan-Africanism*. New York: Vintage, 1971.
- Carmichael, Stokely with Ekwueme Michael Thelwell. *Ready for Revolution: The Life and Struggles of Stokely Carmichael [Kwame Ture]*. New York: Simon and Schuster, 2003.
- Carson, Clayborne. *In Struggle: SNCC and the Black Awakening of the 1960s*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1981.
- Cha-Jua, Sundiata Keita and Clarence Lang. "The 'Long Movement' as Vampire: Temporal and Spatial Fallacies in Recent Black Freedom Studies." *Journal of African American History* 92. 2 (Spring 2007): pp.265-288.
- Churchill, Ward and Jim Vander Wall, eds. *The COINTELPRO Papers: Documents from the FBI's Secret Wars Against Dissent in the United States*. Boston: South End Press, 1990.

- Cleaver, Kathleen and George Katsiaficas, eds. *Liberation, Imagination, and the Black Panther Party: A New Look at the Panthers and Their Legacy*. New York: Routledge, 2001.
- Committee on Internal Security, House of Representatives. *Gun-Barrel Politics: The Black Panther Party, 1966-1971*, 92d Cong., 1st sess.. Washington, D.C.: Government Printing Office, 1971.
- デイヴィス、アンジェラ（上杉忍訳）『監獄ビジネス——グローバリズムと産獄複合体』岩波書店、2008年。
- de Gramont, Sanche. "Our Other Man in Algiers," *New York Times Magazine*, November 1, 1970.
- D'Emilio, John. *Lost Prophet: The Life and Times of Bayard Rustin*. Chicago: University of Chicago Press, 2004.
- Dudziak, Mary L. *Cold War Civil Rights: Race and the Image of American Democracy*. Princeton: Princeton University Press, 2000.
- Dyson, Michael Eric. *I May Not Get There with You: The True Martin Luther King, Jr.* New York: Free Press, 2000.
- Eskew, Glenn T. *But for Birmingham: The Local and National Movements in the Civil Rights Struggle*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1997.
- Farmer, James. *Lay Bare the Heart: An Autobiography of the Civil Rights Movement*. New York: Plume, 1985.
- 藤永康政「「長く暑い夏」再考——60年代黒人ラディカルズの想像力と都市暴動に関する一考察」『山口大学文学会志』58巻、2008年2月、63-89頁。
- 「ヒップホップの想像力とアメリカ現代社会」山本真弓編『文化と政治の翻訳学——異文化研究と翻訳の可能性』明石書店、2010年、69-94頁。
- Fujino, Diane C. *Samurai among Panthers: Richard Aoki on Race, Resistance, and a Paradoxical Life*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2012.
- ゲインズ、ケヴィン（藤永康政訳）「政治コミュニティを追い求めるブラック・ラディカリズム——ガーナのアフリカ系アメリカ人亡命者たち」樋口映美編『流動する〈黒人〉コミュニティ——アメリカ史を問う』彩流社、2012年、149-171頁。
- Garrow, David J. *Bearing the Cross: Martin Luther King, Jr., and the Southern Christian Leadership Conference*. New York: Vintage, 1986.
- . *Protest at Selma: Martin Luther King, Jr., and the Voting Rights Act of 1965*. New Haven: Yale University Press, 1978.
- Grimshaw, William J. *Bitter Fruit: Black Politics and the Chicago Machine, 1931-1991*. Chicago: University of Chicago Press, 1992.
- Holt, Len. *The Summer That Didn't End: The Story of the Mississippi Civil Rights Project of 1964*. New York: Da Capo, 1965.
- Horowitz, David and Peter Collier. *Destructive Generation: Second Thoughts about the '60s*. New York: Free Press, 1989.
- "Internal Dispute Rends Panthers." *New York Times*, March 7, 1971.
- 井関正久「西ドイツ新左翼における「アメリカ」の受容」油井大三郎編『越境する1960年代——米・日・西欧の国際比較』彩流社、2012年、263-281頁。

- Jones, Charles E., ed. *The Black Panther Party Reconsidered*. Baltimore: Black Classic Press, 1998.
- Jones, William P. *The March on Washington: Jobs, Freedom, and the Forgotten History of Civil Rights*. New York: W. W. Norton, 2013.
- Joseph, Peniel E. "Introduction: Toward a Historiography of the Black Power Movement." in *The Black Power Movement: Rethinking the Civil Rights-Black Power Era*. Ed., Peniel E. Joseph. New York: Routledge, 2006.
- 川島正樹『アメリカ市民権運動の歴史——連鎖する地域闘争と合衆国社会』名古屋大学出版会, 2008年.
- King, Jr., Martin Luther. *Stride Toward Freedom*. New York: Harper & Row, 1958.
- Klarman, Michael J. *From Jim Crow to Civil Rights: The Supreme Court and the Struggle for Racial Equality*. New York: Oxford University Press, 2004.
- Korstad, Robert and Nelson Lichtenstein. "Opportunities Found and Lost: Labor, Radicals, and the Early Civil Rights Movement." *Journal of American History* 75. 3 (December, 1988): pp.786-811.
- Kotlowski, Dean J. *Nixon's Civil Rights: Politics, Principle, and Policy*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001.
- 黒崎真「マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの人格、思想、理念形成の源泉」『欧米文化研究 (筑波大学)』20巻, 2002年, 1-21頁.
- Lazerow, Jama and Yohuru Williams, eds. *In Search of the Black Panther Party: New Perspective on a Revolutionary Movement*. Durham: Duke University Press, 2006.
- McCartney, John T. *Black Power Ideologies: An Essay in African-American Political Thought*. Philadelphia: Temple University Press, 1992.
- McGuire, Danielle L. *At the Dark End of the Street: Black Women, Rape, and Resistance - A New History of the Civil Rights Movement from Rosa Parks to the Rise of Black Power*. New York: Vintage, 2010.
- McMillen, Neil R. *The Citizen's Council: Organized Resistance to the Second Reconstruction, 1954-64*. Urbana: University of Illinois Press, 1971.
- McWhorter, Diane. *Carry Me Home: Birmingham, Alabama, the Climactic Battle of the Civil Rights Revolution*. New York: Touchstone Book, 2001.
- Meier, August and Elliot Rudwick. *CORE: A Study in the Civil Rights Movement 1942-1968*. Urbana: University of Illinois Press, 1975.
- Morris, Aldon D. *The Origins of the Civil Rights Movement: Black Communities Organizing for Change*. New York: Free Press, 1984.
- "New Haven Police Set Off Tear Gas at Panther Rally." *New York Times*, May 2, 1970.
- "New Haven Rally Ends A Day Early." *New York Times*, May 3, 1970.
- "Nixon Puts 'Bums' Label on Some College Radicals." *New York Times*, May 2, 1970.
- O'Reilly, Kenneth. *Nixon's Piano: Presidents and Racial Politics from Washington to Clinton*. New York: Free Press, 1995.
- . "Racial Matters": *The FBI's Secret File on Black America, 1960-1972*. New York: Free Press, 1989.

- "Panthers Await Newton's Return." *New York Times*, July 8, 1970.
- "Panthers Fear Growing Intraparty Strife." *New York Times*, April 10, 1971.
- "Panthers: They Are Not the Same Organization." *New York Times*, July 27, 1969.
- Pearson, Hugh. *The Shadow of the Panther: Huey Newton and the Price of Black Power in America*. New York: Addison-Wesley, 1994.
- Raines, Howell, ed. *My Soul Is Rested: The Story of the Civil Rights Movement in the Deep South*. New York: Penguin, 1977.
- Rosenberg, Gerald N. *The Hollow Hope: Can Courts Bring About Social Change?* Chicago: University of Chicago Press, 2008.
- Sellers, Cleveland with Robert Terrell. *The River of No Return: The Autobiography of a Black Militant and the Life and Death of SNCC*. Jackson, Miss.: University Press of Mississippi, 1973.
- "S.N.C.C. in Decline After 8 Years in Lead." *New York Times*, October 7, 1968.
- "Strike Explained by Yale Students." *New York Times*, April 25, 1970.
- Theoharis, Jeanne. *The Rebellious Life of Mrs. Rosa Parks*. Boston: Beacon Press, 2013.
- Thornton III, J. Mills. "Challenge and Response in the Montgomery Bus Boycott of 1955-1956." in *The Walking City: The Montgomery Bus Boycott, 1955-1956*. Ed. David J. Garrow. New York: Carlson, 1989.
- U. S. Congress, Senate, Select Committee to Study Governmental Operations with Respect to Intelligence Activities. *Final Report: Book III, Supplementary Detailed Staff Reports on Intelligence Activities and the Rights of Americans*. Washington, D.C.: Government Printing Office, 1976.
- "U.S. Troops Flown in for Panther Rally." *New York Times*, May 1, 1970.
- Von Eschen, Penny M. *Race Against Empire: Black Americans and Anticolonialism, 1937-1957*. Ithaca: Cornell University Press, 1997.
- Wilkins, Roy. *Standing Fast*. New York: Penguin, 1982.
- Wilkins, Roy and Ramsey Clark. *Search and Destroy: A Report by the Commission of Inquiry into the Black Panthers and the Police*. New York: Metropolitan Applied Research Center, 1973.
- Williams, Yohuru. *Black Politics / White Power: Civil Rights, Black Power, and the Black Panthers in New Haven*. Malden: Blackwell, 2008.
- "Yale Faculty Rejects Proposal to Cancel All Classes to Support Panthers." *New York Times*, April 24, 1970.
- "Yale Rally Cry: 'Bulldog and Panther'." *New York Times*, May 1, 1970.
- "Yale Strike Urged to Back Panthers." *New York Times*, April 21, 1970.
- "Yale Student Petition Supports Brewster's Stand on Panthers." *New York Times*, April 30, 1970.
- "Yale Suspends 5 on Charges of Disrupting a Lecture." *New York Times*, December 19, 1969.
- "Yale to Open Gates This Weekend to Protesters Assembling to Support Black Panthers." *New York Times*, April 30, 1970.